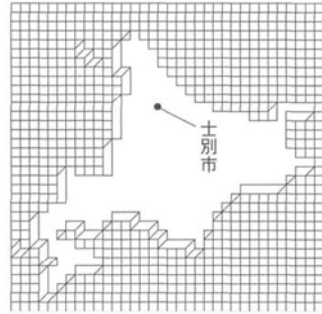


## 連載



### あのマチ ・ 地域おこし活躍中 このムラ

No.38

## 士別市の事例

― 北の大地に活力と潤いある農業・農村を ―

### 士別市の概況

士別市は、一九五四年に士別町、上士別村、多寄村、温根別村の四ヶ町村が合併し北海道で二〇番目の市として誕生した。

本年市政施行五〇周年を迎えた市(現在人口約二万二千人)は、サフォーク種羊をテーマとした「サフォークランド士別」、トヨタ自動車、ヤマハ発動機、プリウスなど多くの自動車関連メー

カーが立地する「寒冷地試験研究のまち」また「スポーツ合宿の里」しての顔を持っているが、天塩川流域を中心とした豊富な水と緑の大地に恵まれ、農業を基幹農業として発展してきた。

位置的には、札幌から一九二km、旭川より五三 km 北上した北部北海道地域の中心部にあつて、苫前、羽幌地区の日本海沿岸と紋別地区のオホーツク沿岸を結ぶ中間地点に位置している。

地形は上川管内特有の盆地形

態で、平野部となだらかな丘陵地帯から構成されており、東西三二・八 km、南北三五・七 km で総面積は五九七・三 km<sup>2</sup>である。その形状は翼を広げた巨鳥の容姿に例えられる。

気象条件は内陸性気候で、五月から九月前半にかけて比較的高温多照に恵まれるが、オホーツク海高気圧の影響により低温状態が続くことも少なくない。十一月下旬には初霜・初雪が観測される。二〇〇三年の年間平

均気温は五・四度で最高気温は二九・四度であり、最低気温はマイナス三一・四度であった。また年間降水量は九五二mm、積雪は平坦では一 m、山間部では二 m を超える積雪寒冷な豪雪地帯でもある。

### 士別市農業・農村 活性化条例の制定

天塩川の肥沃な土壌の恩恵を受けて、平坦地では水田を主体

とし、丘陵地帯では畑作・酪農によって発展し、農業は基幹産業として重要な役割を果たしている。しかし、一九九一年と二〇〇一年を比較すると、農家戸数は一、四六四戸から九七七戸に三三％減少した。農業従事者の高齢化も進行し、六〇歳以上が約四割。また担い手不足も進行し、後継者がいないが農家は八割を占めている。農産物価格の低迷による農家所得の減少と相まって、農地の需給均衡が崩れつつある。

こうした中で、高齢農家や兼業農家の農地には管理が不十分な圃場も見受けられ、将来的には耕作放棄・不作付けも危惧されている。さらに、輪作体系や農地の利用集積が進まず、これらに対応する施策が必要とされている。

そのため、(一)収益性の高い農業の発展、(二)活力溢れる豊

かで住みよい農村の創造、(三)農業・農村を市民の創意で、貴重な財産として将来に継承する目的で「土別市農業・農村活性化条例」を制定し、二〇〇〇年四月施行した。

この条例には、五つの「基本方針」と二の施策を網羅し、「いま、何を行わなければならないか」を総合的かつ計画的に明らかにするために「土別市農業・農村活性化計画」を策定し推進中である。

#### ◆第一期計画

(二〇〇〇年～二〇〇二年)  
「土別市の土壌や気象条件等に適合した作付け体系を確立する」ことを基本として策定し、具体的に、輪作体系を組める「土づくり」(明・暗渠、心土破碎、休閒緑肥、有機物(堆肥))を推進した。

#### ◆第二期計画

(二〇〇三年～二〇〇六年)

土別市農業・農村を取り巻く情勢は、第一期計画策定当時から大きく変化していないと認識しながらも、WTO協定、「新たな米政策改革大綱」、市町村合併をはじめとする各分野での広域化など、国内外の今日的な情勢を踏まえ、「土づくり」を柱とした第一期計画を補完することで策定をし、現在鋭意推進中である。

### 土別市農業の概要

詳しく農業を見よう。総農家戸数は一、〇一〇戸である。農家一戸当たりの平均耕地面積は一・五・一畝であり、また水田耕作農家が八八五戸で畑作農家が七七〇戸存在することから、土別市の農家は「田畑作農家」である。

経営耕地面積の規模別農家戸数の構成比をみると、土別市は

北海道全体と比較して、五畝未満の階層と三〇畝以上の階層で構成比が低く、五～一〇畝の階層と一〇～二〇畝の階層で構成比が高いことがわかる。農家一戸当たりの平均耕地面積一・五・一畝を考えると、土別市の農家は中規模層に集中していることが特徴である。(表1)

次に農業生産を見ると、土別市では九、二九一畝において販売を目的とした作付けがなされている。作物別構成比では北海道合計と比較し、水稲の四〇・三％と豆類の一六・八％において高くなっている。小麦の構成比は北海道合計の一八・五％と同じであり、野菜類では七・四％と北海道合計より低い。

土別市は水田転作を含む畑作農業では野菜作が一定程度展開しているが、基本的には土地利用型作物を中心に展開しているといえる。(表2)

士別市農業・農村活性化条例の体系と主な施策

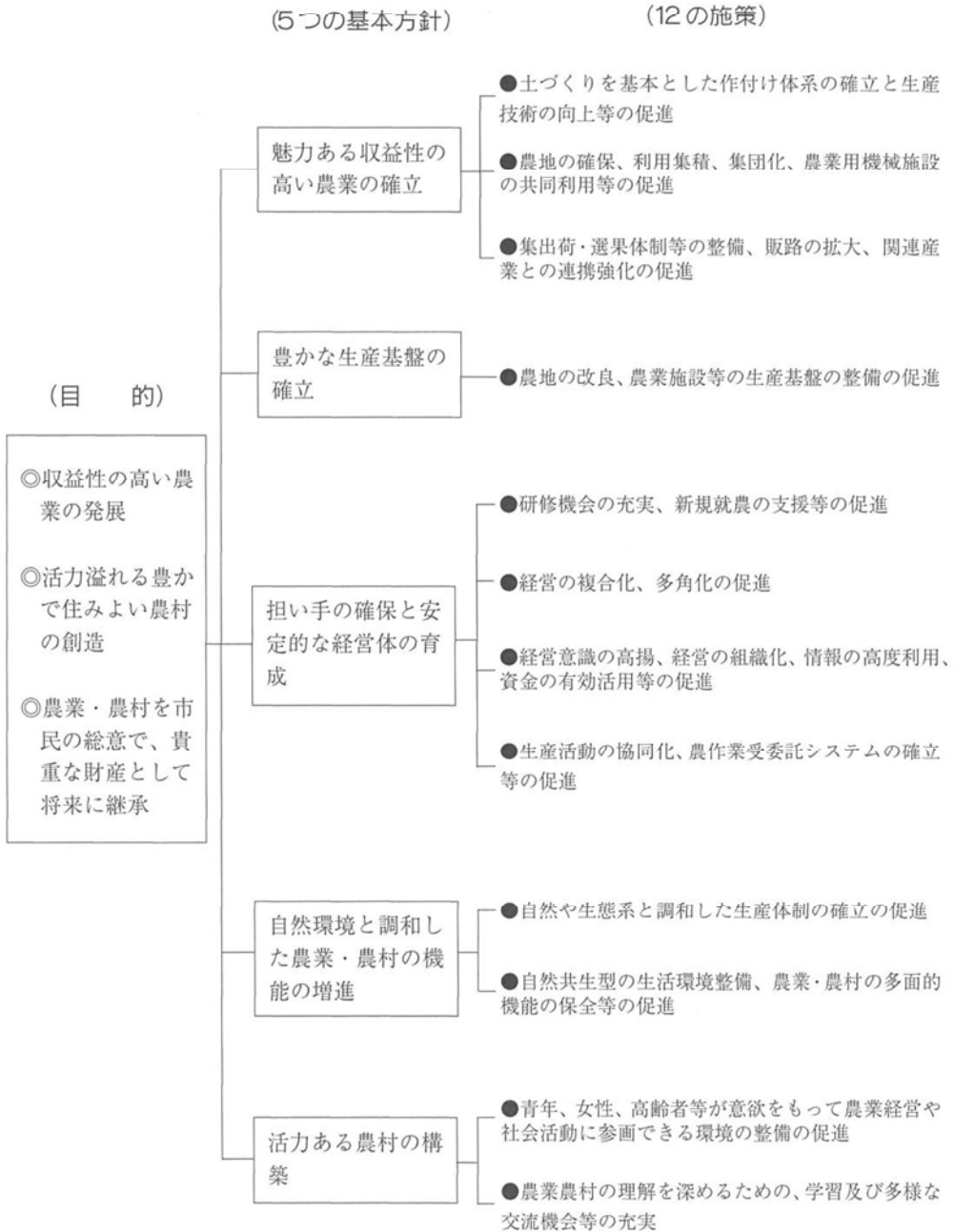


表1 経営耕地面積規模別農家戸数の分布

|       | 戸数     | 構成比 (%)   |           |             |           |                |                 |                 |                 |              |
|-------|--------|-----------|-----------|-------------|-----------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|--------------|
|       | 総計     | 自給的<br>農家 | 販売<br>農家計 | 1.0ha<br>未満 | 1.0-5.0ha | 5.0-<br>10.0ha | 10.0-<br>20.0ha | 20.0-<br>30.0ha | 30.0-<br>40.0ha | 50.0ha<br>以上 |
| 士別市   | 1,010  | 8.6       | 91.4      | 2.9         | 15.6      | 28.4           | 28.9            | 9.4             | 4.2             | 2.0          |
| 北海道合計 | 69,841 | 10.4      | 89.6      | 8.3         | 20.3      | 18.4           | 18.3            | 9.3             | 9.1             | 5.9          |

資料：農林水産統計情報部「2000年センサス 北海道」より作成

表2 販売目的の作付面積と作物別構成比

|       | 実数 (ha) | 構成比 (%) |      |     |      |      |      |      |     |
|-------|---------|---------|------|-----|------|------|------|------|-----|
|       | 作付面積    | 水稲      | 麦類   | 雑穀  | いも類  | 豆類   | 工芸作物 | 野菜類  | その他 |
| 士別市   | 9,291   | 40.3    | 18.5 | 4.2 | 3.0  | 16.0 | 4.9  | 7.4  | 5.5 |
| 北海道合計 | 506,268 | 26.9    | 18.5 | 2.3 | 11.5 | 10.8 | 13.7 | 10.3 | 6.0 |

資料：農林水産統計情報部「2000年センサス 北海道」より作成  
 註) その他は花卉・花木類、種苗・苗木類、その他の作物を含む

表3 農産物販売金額規模別農家の状況

|       | 戸数     | 構成比 (%) |             |               |                 |                   |                   |               |
|-------|--------|---------|-------------|---------------|-----------------|-------------------|-------------------|---------------|
|       | 合計     | 販売なし    | 100万円<br>未満 | 100-<br>500万円 | 500-<br>1,000万円 | 1,000-<br>2,000万円 | 2,000-<br>3,000万円 | 3,000万<br>円以上 |
| 士別市   | 923    | 5.3     | 7.7         | 19.0          | 30.9            | 27.0              | 6.6               | 3.6           |
| 北海道合計 | 62,611 | 5.4     | 9.4         | 18.3          | 18.2            | 22.7              | 13.7              | 12.3          |

資料：農林水産統計情報部「2000年センサス 北海道」より作成

表4 専兼業別農家戸数の状況

|       | 戸数     | 構成比 (%) |       |       |
|-------|--------|---------|-------|-------|
|       | 販売農家計  | 専業      | 第1種兼業 | 第2種兼業 |
| 士別市   | 923    | 32.1    | 53.8  | 14.1  |
| 北海道合計 | 62,611 | 46.4    | 37.8  | 15.8  |

資料：農林水産統計情報部「2000年センサス 北海道」より作成。

表5 経営者年齢別農家戸数の状況

|       | 戸数     | 構成比 (%) |        |        |        |        |       |
|-------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|-------|
|       | 合計     | 29歳以下   | 30-39歳 | 40-49歳 | 50-59歳 | 60-69歳 | 70歳以上 |
| 士別市   | 923    | 0.5     | 8.9    | 26.3   | 30.2   | 26.2   | 7.8   |
| 北海道合計 | 62,611 | 0.5     | 9.2    | 26.4   | 27.5   | 24.2   | 12.2  |

資料：農林水産統計情報部「2000年センサス 北海道」より作成。

さらに農家経済の状況を、農産物販売金額の規模別農家戸数から農業粗収益の面で把握すると、士別市は100万円未満の階層と21,000万円以上の階層構成比において北海道合計より低く、100〜21,000万円未満の三つの階層において高くなっている。士別市は北海道合計と比較して兼業農家の割合が高く、第一種兼業に集中していることから、農閑期である冬季に農外就業することで農家所得の維持・確保を図っていると考えられる。(表3・表4)

こうした状況にあつて、経営者年齢別の農家戸数では70歳以上の農家構成比において北海道合計より低くなっているが、50〜59歳と60〜69歳の構成比において若干高い。(表5)また、農業就業人口の平均年齢では北海道合計が五四・三歳であるのに対し、士別市は五五・一歳と高齢化が進展している。同時に同居後継者割合で北海道合計が三〇・二%に対し、士別市は一・二%と低く、後継者不足も深刻な問題となっている。

作付面積(二〇〇二年度)を見ると、水稲三、三〇〇畝、小麦二、一四〇畝、馬鈴薯二五七畝、大・小豆類一、二四二畝、てんさい五一六畝、野菜七一〇畝、飼料作物五、〇一〇畝、である。一方、畜産は、乳用牛四、六九〇頭、肉用牛一、五〇〇頭、馬二一六頭、めん羊三〇五頭、にわとり一四、〇〇〇羽飼育されている。これを農家一戸当たりの飼育頭数では、乳用牛七八頭、肉用牛三三三頭となっている。

農業粗生産額(二〇〇三年)は、一〇一億五千万円である。主なものは、水稲三七億一千万円、野菜類一六億七千万円、豆類八億円、乳用牛一六億七千万

円、肉用牛九億一千万円である。

## 地域活性化の歩みと試み

～川西有機農業研究会の

活動を見る～

今回の取材で、地域を元気にする試みを行っている川西地区有機農業研究会の会長 足利和茂さんを訪問しお話を聞いた。

土別市は稲作の転作率が高く、畑作、野菜、酪農など多様な農業経営形態へと移行している。しかし、川西は水田がほとんどなく、粘土地の傾斜地に畑作が広がっている。転作奨励金も少なく、中山間地直接支払いも畑作のメリットは小さいため、農家の経済状態はかなり厳しい。

こんな中で九〇年代には一戸の離農が発生し、現在の農家戸数は三〇戸にまで減少している。後継者が確保されているの

は三戸に過ぎない。経営面積は平均で二畝になるが、一三〇畝は地区外からの入作によってかろうじて維持されている。現在、小麦の低収益性、後継者不足、農地の受け手不足が集中的に発生している。

今後を展望した場合、経営主の高齢化が進展し、農地の放出はさらに拡大することが見込まれる。さらに、集約化といった場合にも、北海道の野菜産地が共通に抱える輸入野菜との競合といった課題に、対処しなければならぬ。これらを解決するには既存の販売ルートや手法にこだわるばかりでは困難である。自由な発想が新しい試みを求められている時代である。その試みを川西地区の活動で見てみよう。

### 一、川西とはどんなところ

川西は、土別市を中心とした

盆地の中で、平坦部から丘陵地へとかかる地域に位置している。幾重にもつらなる丘には、馬鈴しょ、小麦、豆、てん菜、そばなどの畑が見事なコントラストを描きながら、展開している。水田が多い日本の中では、こうした丘陵地の畑というのは、北海道、中でも上川盆地の周辺に特徴的にみられる景色である。丘の町として有名な美瑛、富良野なども、上川の盆地の周辺部に位置する地域である。

### 二、亜麻と除虫菊の丘

川西の始まりは、一九〇七年に入植したことに始まる。戦前には、亜麻（繊維の原料）や除虫菊（蚊取り線香の原料として使われていた）の産地として、世界に向けて輸出するほどの産地であった。

除虫菊は日本の特産品として一時は世界の総生産の八割を占

め、うち七割が北海道で生産されていた。川西では丘陵地帯の適作物であったことや、収益性が高かったために急速に作付が拡大した。

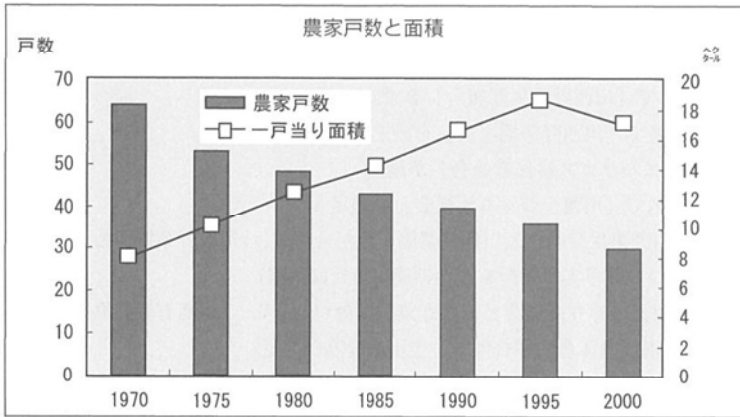
最盛期は一九二五年頃から第二次大戦前で、一九三五年前後には土別市全体で二、〇〇〇畝の作付があった。しかし、一九三九年の第二次大戦の開戦によって輸出が困難となり、また労働力不足もあり作付は次第に減少した。その後化学薬品の発達とともに需要が減少し、一九五〇年代中頃には川西から姿を消していった。

### 三、大規模化という壁

一九五〇年代頃から徐々に農業の機械化が進むにつれて、丘陵の傾斜では大型機械の導入ができずに、機械化大規模農業という戦後の日本・北海道農業が辿っていくことになる路線からは

## 川西地区の概要

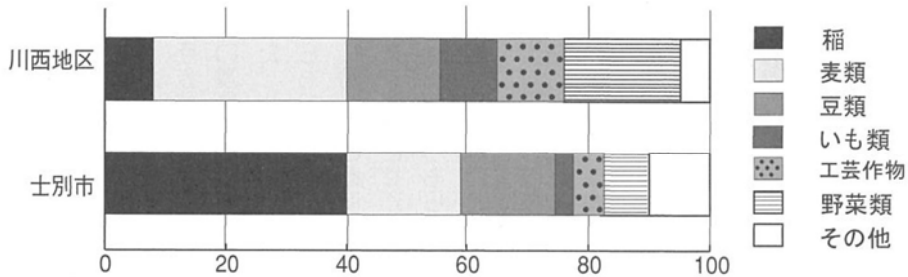
農家の減少につれて進む規模拡大



## 土別市で随一の畑作地帯

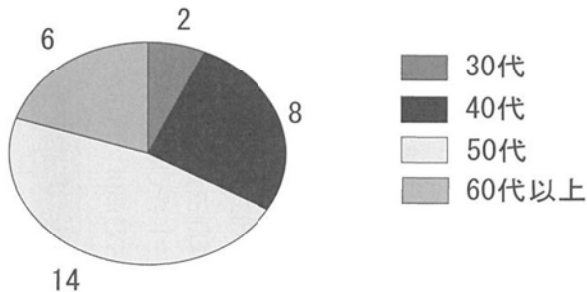
作付面積 1位：麦類 (137ha) 2位：野菜類 (85ha) 3位：豆類 (68ha)  
馬鈴しょ、てんさい、かぼちゃは土別市全体の6割を超える主産地。

## 川西地区の作付割合



## 50代が支える川西農業 (人)

### 農家経営主の年代



川西地区における集落活動  
(1978年～2002年)

| 年次    | 活動の概要  |
|-------|--|
| 1978年 | 「てん菜振興会」設立   |
| 1979年 | 6名で「川西野菜生産組合」を設立   |
| 1982年 | 23名で「川西野菜協ギ会」を設立   |
| 1983年 | 「アスパラガス耕作者組合」が設立   |
| 1984年 | 30名で「川西土づくり協議会」を発足   |
| 1985年 | 川西野菜生産組合と川西野菜協ギ会が合併し、「川西野菜振興会」を設立<br>(9つの農事実行組合を5つの農事組合に改編)    |
| 1989年 | 川西土づくり協議会と川西野菜振興会が合併し、「川西有機農業研究会」を設立<br>(土別市内4農協が合併し、土別市農協が発足) |
| 1990年 | 「むらとまちばのお祭り」を開催。(1996年まで毎年開催)                                  |
| 1991年 | 実のなる小果樹の植樹。(1993年まで実施)   |
| 1998年 | トヨタ生協との交流。(受け入れと現地イベントの開催)                                     |
| 2000年 | 休閒緑肥導入モデル補助事業「資源循環型農業推進総合対策事業」                                 |
| 2002年 | 加工部会・交流部会・販売部会の3部会制を導入。女性・後継者も加入                               |

やや取り残される形となった。

四 機械の代わりに

しかし、そうしたもともでも、地域としては機械でできない部分を手作業でおこなひながら、独自の農業のやり方を作り上げてきた。川西は、他の地域の農家からも、驚嘆されるほどに、「よく働く」ことによって、地域農業を発展させてきた。「お嫁さんは川西からもらえ、川西にはお嫁に出すな」ということがいわれたそうである。

現在、十勝などの平坦な畑作地帯では、馬鈴しょは機械で収穫している。しかし、川西では、機械で掘り起こしたあとで、農家の方が手で拾い集めている。

五 転機を迎えてた八〇年代

このように展開してきた川西であるが、日本農業全体のうねりの中で、八〇年代中頃から転

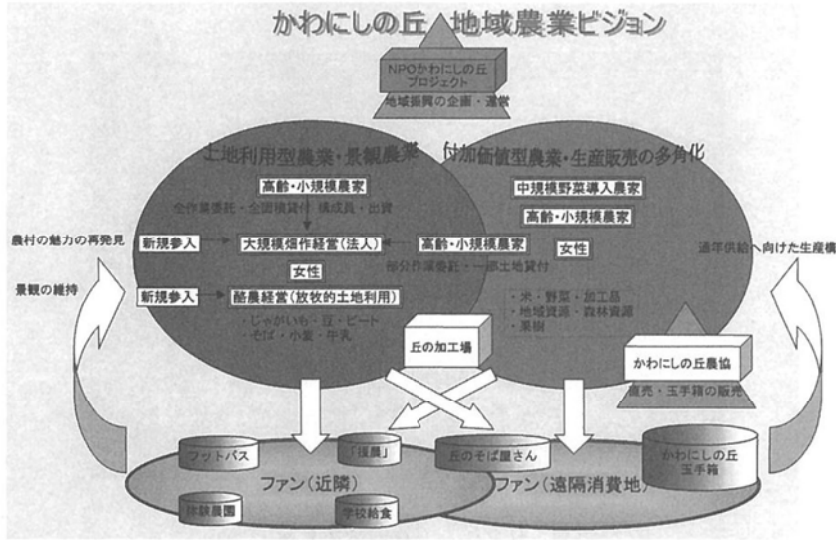
換期を迎えた。畑作物の価格が低下したことで、スイートコーンやアスパラガス、また、それまでのでん粉用の馬鈴しょから転換し、食用、加工用の馬鈴しょの生産を開始した。

六 川西有機農業研究会設立!

一九八九年に、今後の川西地域について考えようと、「川西土づくり協議会」と「川西野菜生産組合」が統合し「川西有機農業研究会」を設立した。目的は「地力の維持増進をはかり有機農業の実践を通して高品質農産物を生産し、地域農業の確立を図ること」である。

設立以来、①栽培技術の研究・普及(かぼちやの整枝栽培や馬鈴しょの減農薬栽培など)、②肥料・資材の共同購入、③即売会などでの消費者との直接交流(「むらとまちばのお祭り」の開催など)、④先進地視察、セミナー





「などの研修活動（新規作物、土づくりなどの進事例を視察）を実施しながら「安心・安全な農産物の提供」と、「みんなが住み続ける地域づくり」をめざし、消費者との交流など様々な活動を行い、地域振興に向けた自主的な取組をおこなってきた。

### 七 開基一〇〇年への不安

そうした取組にもかかわらず、農家の離農や、後継者不足などの問題は解決されず、地域の活力が失われていった。また「川西有機農業研究会」の活動も、九〇年代後半になって停滞した。

それは、九〇年前後から地域農業の構造が大・中・小規模層と、いうように分化したため、地域全体として統一的な活動を行えなかったことが原因である。そのことが「研究会」活動への結集力を低下させた。

例えば、一九九〇年に開始し

た「むらとまちはのお祭り」も当初は地域全体として参加していたが、農作業形態の違いから開催日と作業との調整がつかない農家が出てくるなどとして、参加数が低下し一九九六年に中止した。また、消費者への直売の重要性が経営毎に異なるために、規格外品に近いものを出荷する農家と、厳密に選別して出荷する農家との品質の違いがみられるなど、消費者の信頼を低下させるような事態を招いた。

### 八 新たな協同に向けて

そうした中、もう一度地域おこしのために立ち上がろう、との機運になり、行政や農協などの関係機関に加えて、以前から交流のあった北海道大学農学部農業経済学科協同組合学研究室にも声をかけ、協力を依頼した。そして始まったのが「かわなしの丘協同プロジェクト二〇〇



(写真) 丘を望む「丘のたまため箱」

「カ」は「か」。

## かわにし丘協同プロジェクト二〇〇七

～開基一〇〇年を目指して～

「かわにしの丘協同プロジェクト二〇〇七」とは、土別市川西地区の開基一〇〇周年を迎える二〇〇七年までに、農家経済の悪化、担い手不足、自然的条件などから困難な局面に直面している川西地区の農業活性化し「新たな地域農業の姿」を確立し、その実現のために様々な活動を行うプロジェクトのことである。プロジェクトは、川西地区の農家の自主的研究組織である「川西有機農業研究会」および「北海道大学農学部協同組合学研究室」が中心となり、土別市役所、農協、農業改良普及センターなどの協力を受け行う。

初年である二〇〇三年は、農家の状況把握をかねて川西の全農家を対象に聞き取り調査が行われた。そして二〇〇四年には「かわにしの丘地域農業ビジョン」を提示し、その実現に向けて動き出した。

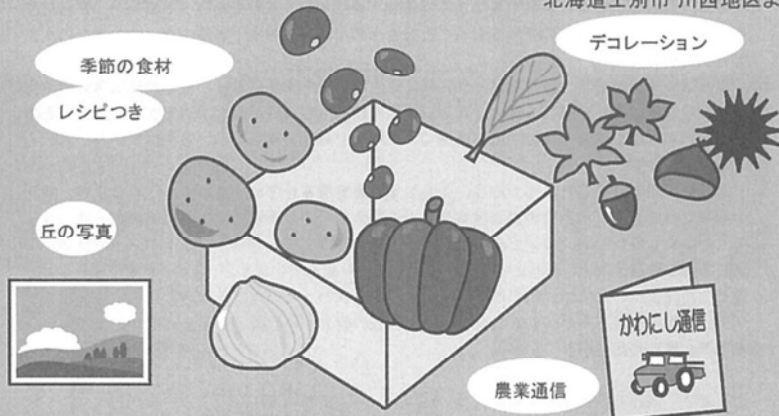
「かわにしの丘地域農業ビジョン」は、「土地利用型農業・景観農業」と「付加価値型農業・生産販売の多角化」という二つの農業に分け、丘の景観の維持と農家経済の向上を目指すものである。それを支える組織として、「かわにしの丘農協」（かわにしの丘地域農業ビジョン参照）が丘のたまため箱、直販を行い、「NPOかわにしの丘プロジェクト」が地域農業振興の企画運営を行う。NPOには川西のファンも含めて幅広く構成員・出資者を募集する計画である。

このビジョンを実現するため五つの主人公である、「女性」「家

かわにし丘協同プロジェクト2007

# 丘のたまため箱

北海道士別市 川西地区より



かわにし丘の季節をまるごと食卓へお届けします

## 第1便 夏の丘から

- ★早どりの貴族たち  
男爵いも  
(ジャーマンポテトに)  
伯爵いも  
(ポテトチップスに)
- ★夏のサラダたち  
ブロッコリー  
朝もぎトウキビ
- ★デコレーション  
麦穂 (食卓の一輪挿しに)  
男爵の花 (押し花)

< 8月下旬発送予定 >

## 第2便 秋の丘から

- ★おいしいももミジたち  
キタアカリ (黄)  
レッドアンデス (赤)  
とうや (白)  
ほんものももミジ
- ★秋の食材  
坊ちゃんカボチャ  
タマネギ
- ★デコレーション  
稲穂 (唐揚げポップコーン  
(コメ))  
イガイガ栗  
朴葉 (ほおぼ) (焼き皿)

< 10月下旬発送予定 >

## 第3便 冬の丘から

- ★晩てのおいもたち  
農林1号 (煮物に)  
トヨシロ (フレンチフライに)
- ★冬の煮豆たち  
(手作り小鉢つき)  
小豆  
金時  
黒豆 (お正月用に)  
おまけのそば粉 (そばがきに)
- ★デコレーション  
クリスマスリース  
リスからの贈り物  
(クルミ・ドングリ)

< 12月中旬発送予定 >

※気候や生育状況によっては、予定の中身と異なる場合があります。

代 金 10,000円 (3回コース 送料込み) ※限定100セット !!

お申し込み期限 2004年8月10日 (火)

お問い合わせ先 かわにし丘協同プロジェクト2007 たまため箱部会事務局

TEL 090-5224-8925 (松本) <http://kawanishino-oka.org/>

# かわにしの丘便り

2004夏号

## 丘のたまたま箱 生産者紹介

今回お届けした農産物を生産した、川西の農家4名に登場してもらいました。

①経営面積と主な作物、②担当作物について、③「丘のたまたま箱」への意気込み、④メッセージ

男爵いも



高井 芳弘 44歳

川西町 11 線 TEL (01652) 3-0419

- ①36ha/ブロッコリー・じゃがいも・かぼちゃ・そば・ピート
- ②好天に恵まれ良品質のものが収穫できましたが、少し小ぶりになりました。
- ③広く皆さんに普及できれば…と願っています。
- ④食の安全を考え、真剣に取り組んでいます。

玉ねぎ



佐藤 強 44歳

川西町 5 線 TEL (01652) 3-1140

- ②生育後半の早魓（かんばつ）でやや小ぶりになりましたが、品質はまずまずだと思います。
- ③プロジェクトの企画で川西のファンがたくさん出来れば…
- ④出来るだけ多くの人に川西の良さを知ってもらいたいです。

私たちが  
作りました

- ①15ha/玉葱・水稲・ピート・メロン・小麦・南瓜
- ②生育後半の水分不足はあったが、まあまあ出来です。
- ③来年から甘い玉ねぎに挑戦したいと思っています。
- ④川西の自然の素晴らしさを伝えていきたいです。

伯爵いも



神田 敏美 44歳

川西町 6 線 TEL (01652) 3-0213

- ①40ha（足利&神田の共同経営）じゃがいも・小麦・ピート・小豆・コーン・玉ねぎ・南瓜・そば・水稲

- ②播種時期が遅れたので、一度に植えつけましたが、これが失敗の始まり。収穫期間が短くなり、今回の出荷はぎりぎり～やや過熟かな…
- ③代表の立場としては、デコレーションに皆さんがどう反応されるのか少し不安です…
- ④心地よい風・空気の美味しい川西町へ、是非一度はお越しください。

トウモロコシ



足利 和茂 51歳

川西町 6 線 TEL (01652) 9-2111

族経営」「法人経営」「高齢者」「ファン」がそれぞれの役割を果たして、地域農業を発展させていくことを目指している。

川西は、傾斜地や粘土質土壌など農作業には不利な自然条件にあり、近年の農業情勢の悪化で地域の農家は厳しい局面を迎えている。川西の丘をこれからも守り、さらに地域を発展させていくために、ビジョンの実現に向かい、「川西有機農業研究会 会員二三百・四〇人の連携を一層強くしながら着実に歩んで行く」と足利会長は熱く語ってくれた。

### 「かわにし」の「フットパス」

二〇〇四年の取り組みの一つである、「かわにし」の丘フットパス二〇〇四」は八月八日実現した。フットパスとは、イギリス発祥で市街や畑、牧草地に張り巡らされた散歩をするための小

道・散策路を意味するが、川西地区の散策路を歩こうと、第五回市民ウォーキング大会を兼ね、土別市政五〇周年記念共同企画の中で行われた。

スタート地点である川西地区会館に、土別市と札幌市から約一五〇人が集合した。参加のうたい文句はこうである。「小麦畑ソバの可憐な白い花 ひまわり

の咲く丘の中をのんびりと自分たちのペースで散策してみませんか」筆者もこの文句にマイペースの散策を実行しようと思気込んで参加した。

散策コースは二つ、ファミリーコース約六kmとランニングコース一km。参加者は丘陵に配置された壮麗な景観を各自マイペースで満喫したのであるが、当日の気温は集合の九時に二七・一℃、筆者が参加したランニングコースが終了する一二時には二九・二℃であり全員

「満喫」したかどうか首をかしげる酷暑であった。因みに当日の最高気温は三一・六℃であった。しかし暑さにもかかわらず地域住民との交流に成果があった。

### 「丘のたまたまて箱」(宅配便)

馬鈴しょの他に小麦や豆などの畑作物、かぼちゃ、玉ねぎといった野菜と、さらに農家手作りの工芸品や自然の恵みをまるごと専用の箱にパックし、年三回(①八月下旬、②十月、③十二月)夏の丘から、秋の丘から、冬の丘から申込者の家庭へ届ける「丘のたまたまて箱」である。

夏のためて箱は、男爵いも、伯爵いも、ブロッコリー、朝もぎスイートコーン、玉ねぎ、メロンとデコレーションとして良卓の一輪挿し用に麦穂を入れ、川西の味覚や文化を実際に味わっていたきたいとの思いを込

めて荷造りし九月上旬に初出荷を終えた。併せて箱の中に、生産者を紹介する顔写真と、①経営面積と主な作物、②担当作物、③「丘のたまたまて箱」への意気込み、④メッセージを記載した「かわにし」の丘便り 二〇〇四夏号」を入れた。(前頁「かわにし」の丘便り」参照)

### 「かわにし」の「フットパス」

三越札幌店前の一階テラス内で八月一九日に、土別市・川西地区から「丘の文化を発信！」するとのキャッチフレーズのもと、足利会長ほか川西の丘協同プロジェクト二〇〇七のメンバーが、川西地区のファンになってもらうこと、農産物の販路開拓で地域活性化を図ろう、と札幌市民に「丘のたまたまて箱」の紹介、申し込みの案内や、川西地区自慢の丘の景観写真、川西の紹介文をパネルにはり展示、PRし

た。またとれたて馬鈴しよや麦  
穂を無料配布し、抽選で四〇人  
にカプトムシをプレゼントした。

以上紹介した「かわにしの丘  
協同プロジェクト2007」の  
ビジョン策定や「かわにしの丘  
フットパス」「丘のたまたまは」  
「かわにしの丘フェア」等の  
イベントや取組みに対して、北  
大協同組合学研究室の大学院生



達のフレッシュなアイデアが起  
動力になったことを附記したい。

### 中山間地等直接支払制度

終わりに、条件不利地域に対  
する政策として注目を集めてい  
る中山間地域等直接支払制度  
(以下「本制度」と土別市農業の  
関わりについて見よう)。

本制度は二〇〇〇年度か  
ら五力年の実施期間を経て  
本年度が最終年度である。  
二〇〇三年度の北海道の実  
施状況は、実施一〇五市町  
村(実施率九〇%)、集落協  
定数六四一、交付金対象の  
面積三二万六千畝、交付金  
額約七九億円となっている。  
土別市の実績(二〇〇三年  
度)は、協定参加者は九二  
三戸、対象農地面積は二、  
五一四畝、交付金は約一億  
八千万円である。

近年土別市は、農家の高齢化  
や担い手の減少などにより、耕  
作放棄の増加が懸念されるとこ  
ろであり、農業と農村は、安全  
で良質な農産物の安定供給とい  
う重要な役割りを担いながら、  
森林と急傾斜地が多くて平坦な  
耕地が少ないなど、中山間地域  
等が有する立地特性の中で、そ  
の生産活動等をおおして、農業・  
農村が有する国土の保全、生態  
系の保全、水資源のかん養、水  
質の浄化、大気の浄化、自然教育、  
保健休養更には良好な景観形成  
などの多面的機能を如何に維持  
増進させることができるかが、  
今後における大きな課題となっ  
ている。

このため、耕作放棄の発生を  
防止して、多面的機能を維持増  
進していくためには、安定した  
集落基盤のもとで、健全な農業  
生産活動を維持していくこと  
が、何よりも重要であるという

観点から、集落全体、更には全  
市的な集落連合体による共同取  
り組みを基本として、農業生産  
条件の不利を補正するための中  
山間地域等直接支払を実施して  
いる。これにより、適正な農業  
生産活動が維持され、更に収益  
性の高い農業の継続的な発展と、  
活力溢れる豊かで住みよい農村  
が創造されることで、市民はも  
とより市外の人々に対しても、  
多面的機能の効果が広く及ぶも  
のと期待されている。

本制度は急傾斜の水田地帯を  
念頭に設計されているため、畑  
作の関係者が中心の川西ではそ  
れら制度の効果は低い。最も支  
払単価の高い急傾斜の田(二二、  
〇〇〇円/一〇ア)はほとんど  
が上土別に位置しており、川西が  
対象となる緩傾斜の畑は三、五  
〇〇円/一〇アと単価が低い。  
土別市内でも自他共に認めら  
れる川西地区は、制度をそのま

ま適用するとその恩恵にあずかることができなくなってしまう。こうした不公平感は各地区毎にも発生するため、独自の制度運用として、「土別市中山間農業・農村活性化協議会」を設置し、

直接支払金の七割を連合基金として積立て、全市の農家が行う、小規模土地改良事業（暗渠排水管敷設事業、明渠排水路整備事業、土層改良事業）等に助成することとした。直接農家へ支払われるものは、急傾斜農用地にかかわる交付金額の三〇%のみで、後は、集落連合基金として積み立てられ全市の小規模土地改良事業と地区配分として使われるのである。つまり、土別市における直接支払制度の運用は、条件不利地域における農家経営への直接的な支払いだけでなく、土地改良などの生産力の増強を介した支援となっている。

本制度に対する評価について

は、北海道が二〇〇三年市町村に実施したアンケートによると、① 耕作放棄地の発生防止に効果がある、とほとんどの集落が回答している。

② 集落における話し合いが増え、七五%の集落で「地域の連帯感が強化された」と回答している。

③ 担い手の確保等については、認定農業者は協定締結前より三〇%増加、一・二四協定集落で二四九人の新規就農者が確保された。

④ 多面的機能を増進する活動に関しては、「集落協定を契機に活発に行われるようになった」とする集落が「保健休養機能を高める取組」で五六%、「国土保全の取組」で四八%、「地域の景観が良くなった」とする集落が六七%あった。

以上から本制度が中山間地域の活性化に寄与していると考え

られる。

また土別市においても、農地や水路・農道の管理が集落の共同取組で適正に管理されていることや農地の生産基盤も本制度の排水対策等により土づくりの効果が徐々に現れていることにより耕作放棄地の発生防止が図られている、との成果がみられた。今後本制度および「土別市農業・農村活性化条例」に基づく活性化計画の着実な実践で、「活力と潤いある農業・農村」が早期に実現することが期待されている。

## まとめ

今回レポートした土別市は、農業・農村を市民の総意で、貴重な財産として将来に引き継ぐことを先に紹介した「土別市農業・農村活性化条例」の「前文」で決意している。そのため大

事なポイントとして「土作り」

「人作り」を掲げ日夜奮闘中である。「北の大地に活力と潤いある農業・農村を」という熱い気持ちで市民一人ひとりに広がり、川西有機農業研究会の活動のほかに農産物の直販「元氣かあさんの市」や有機減農薬で田植えから収穫まで体験する「きたごりんファーム」等の様々な実践活動が、地域の活性化に直接つながっていることが感じられた。

土別市のこれからは、「土づくり」「人づくり」に立脚した農業・農村から生まれる安全・安心・高品質な農産物の生産と販売および市民との連携による様々な活性化の試みを通して、一層飛躍を遂げるであろうとの感を強くした。

レポート  
地域農研 専任研究員

川原 和雄